日川小学校

「自ら学ぶ子どもを育てる授業づくり」

～授業と家庭学習のサイクル化を目指して～

Ⅰ 主題設定の理由

本校では、これまで活用学習と学級力向上プロジェクトの二本立てで研究を積み重ねてきた。昨年度の研究では算数科だけでなく国語科での活用学習にも挑み、習得した基礎的・基本的な知識や技能を活用して、自分の考えを書く活動を行った。また、授業を構想するにあたって、授業を活性化させる手立ての工夫や一時間ごとのめあての明確化なども研究を行った。これらの取組の成果として、授業に対する児童の意識が高まるとともに、自分の考えを整理して論述することが少しずつ出来るようになってきたことが挙げられる。

しかし、昨年度の全国学力学習状況調査の結果から、活用の内容であるＢ問題よりＡ問題で出される基礎的・基本的の内容の方が本校の児童には定着していない現状が明らかとなった。そして、児童質問紙の集計結果からは、本校の児童は、学習意欲はあっても、家庭学習の習慣化に課題があるという結果が出ている。

そこで、児童の学力向上をめざすためには、基礎的・基本的な知識・技能を定着させることと家庭学習の習慣化を図ることが重要であると考えた。先述した二つの課題を克服させるためには、学校で学び方を学び、学習意欲を高めながら、家庭と連携した学習のサイクルを形成していくことが重要であると考えた。

そのため、今年度は、授業と家庭学習を連動させた授業づくりに研究の重きを置き、どのような課題を出すことで授業が充実し、さらに深い学びにつながるか、授業実践をとおして明らかにしていきたい。また、「やまなしスタンダード」に基づいた授業を意識し、児童が見通しをもち、主体的に学習に取り組める授業づくりをしていきたい。

このような実践を積み重ねていくことで、授業の充実や学びの高度化、授業・学びへの意欲的な参画、授業内容の定着などの効果が図れると考え、このテーマを設定した。

Ⅱ 研究の内容

1　研究授業

これまでの研究の成果を基に、家庭学習と有機的に結び付けた算数科の授業づくりに取り組む。

・第１学年「ひきざん」　武井美奈子教諭
・第２学年「新しい計算を考えよう　～かけ算～」　竹川きよみ教諭
　指導：峡東教育事務所　指導主事　三森　公仁　先生
・第３学年「まるい形を調べよう」　井上　甲斐教諭
・第４学年「広さを調べよう」　小林みずほ教諭
・第５学年「分数のたし算とひき算～分数をもっとくわしく調べよう」　今澤比呂樹教諭
　指導：山梨県教育委員会義務教育課　指導主事　小池　孝二　先生
・第６学年「場合の数」　飯島　裕明教諭
・はぐくみ「重さを数で表そう」　平塚すみり教諭

2　学級力向上プロジェクト

「学級力アンケート」の分析結果をもとに、「スマイルタイム」を通して学級改善を図る。

3　学力向上にかかわる取組

○授業と家庭学習を有機的につなぐ授業づくりについての学習会を行う。

「授業と家庭学習のサイクル化を目指して」
講師：山梨県教育委員会義務教育課　指導主事　冨士池　慎一先生
○特別支援教育に係る学習会を行う。
「ユニバーサルデザイン視点からの対応と改善」
講師：峡東教育事務所　指導主事　三森　公仁先生
○家庭学習の内容について情報交換し、より充実した実践につなげていく。
○週３回の朝学習、週２回の朝読書、および年数回の自学ノート展示・掲示の取組を継続する。

Ⅱ 成果と課題

1　成果

・ 授業と家庭学習を有機的に結び付けるには、単元を構成する既習の学習を見直すとともに、単元を見通しどの時間に何を習得させるか、考え気付かせるかなど、単元の教材研究を密にすることが大切だと分かった。
・ 家庭学習を行うことで、学校で学習したことを再度家庭においてもふり返る機会をつくることができた。児童に取り組ませた家庭学習の内容に、保護者を巻き込んだ内容の課題を取り入れたので、結果的に家庭と学校が連携をすることになり、学校と家庭が両輪となり、児童の学習に取り組んだので、確かな学力をつけることができた。
・ 低学年の場合、家庭学習の内容として、予習ではなく復習を中心にした方が、学習内容の確実な定着を図れることがわかった。また、家庭の協力を得て家庭学習に取り組んだので、学校と家庭が同一歩調で子どもの学力向上に取り組む基盤をつくることができた。
・ 高学年の場合、復習はもちろんであるが、予習も取り入れた家庭学習を行った。このことは、次時の学習への心構えができることになり、子どもがスムーズに授業に参加できる成果につながった。
・ 予習を取り入れ、自分の考えをあらかじめ家庭学習でまとめてきた場合、授業内における言語活動の時間を十分確保することにつながり、通常の授業時よりも子ども同士の意見の交流が活発になることがわかった。

2　課題

・ 家庭学習の場合、学習をする場が家庭になるため、子どもの学習時間や環境を整えるには、家庭の協力が不可欠であり、家庭を巻き込んだ家庭学習が確実に子どもの学力を上げることになることは、今年度の研究で明らかになった。しかし、家庭を巻き込んだ家庭学習を誰しもが行えるわけではなく、家庭の協力がなかなか得られないケースも出てきてしまう。家庭を巻き込んだ家庭学習をどこの家庭でもできるようにするには、どう働きかけていけばよいか、方策を考える必要がある。
・ 研究授業や一人一実践をふり返ると、言語活動を取り入れた授業が多かった。これは、家庭学習で自分の考えをまとめることで、それを他者へ伝える活動を通常より多く取り入れやすくなるためである。しかし、十分な言語活動ができる時間を与えることができなければ、自分の思いを伝えられた成功体験とつながらないので、言語活動を行う際には、子どもたちが話し合える時間を十分確保することが大切だと考える。その成功体験を積み重ねることで、より家庭学習で学習してきたことのメリットが増え、前向きに取り組む子どもが増えるのではないか、また、言語活動に対して抵抗感が減り、表現力の育成にもつながると考える。

Ⅳ 成果物

○各学年における家庭学習を授業と有機的につなげた授業づくりに関する指導案・学習シート・掲示物
○家庭学習がんばりカード・自学ノート紹介用掲示物

（研究主任　小林　みずほ）